

現代資本主義の空間と時間

——世界社会フォーラムに關与するマルクス派の知的類縁性の探究
大屋定晴（北海学園大学）

現代資本主義論を構成する二つの論点

- ① 現代資本主義社会に通じる歴史的過程
- ② 現代資本主義社会に通じる地理的空間

これらの論理的・記述的再構成のなかから現代資本主義の特質と限界を読みこもうとする試み。

・一例：世界システム分析の特色（ウォーラーstein 二〇〇六）

- ① 「国民国家」に代替される「世界システム」の分析単位化
- ② 「社会的時間」に対する問題意識＝資本主義の「長期持続」
- ③ 社会科学の境界への挑戦

⇒資本主義的世界経済の特色

無限の資本蓄積を優先するシステム

- ① 世界規模での分業の有効性
- ② 政治権力の制限・影響関係
- ③ 常態としての独占市場（⇔政治的手法による自己流動化傾向を内蔵）
- ④ 中核・周辺関係
- ⑤ 独占に準ずる状況の溶解過程＝世界経済の循環的な律動の原因＝コンドラチェフ循環（独占→新規参入→過剰生産→利潤率低下→賃金低下→消費減退→有効需要回復のための政治的介入）
- ⑥ 資本主義の長期的趨勢＝既存労働者の賃金上昇に対抗する半プロレタリア家計世帯の「プロレタリア化」⇒さらなる賃金上昇圧力

⇒国家間システムの特色

主権国家体制

- ① 資本主義的企業家の利害に關連
市場ルール、所有権、雇用補償、内部費用の決定、独占の許認可、課税、国際経済関係への影響
- ② 覇権国家の自己解体メカニズム（生産効率性上昇⇔政治的・軍事的予算の増大）

⇒資本主義の「ジオカルチャー」

社会的領域における具体的な政治的結論が引き出せる戦略＝イデオロギー

保守主義／自由主義（フランス革命）

→保守主義／自由主義／急進主義（一八四八年革命）

→自由主義的ナショナリズムへの収斂（反システム運動による再強化）

⇒資本主義的世界経済の危機＝資本主義の長期的趨勢におけるシステム移行の兆し

- ① 資本主義的世界経済の寡占化傾向＋有効需要拡大
→生産費用の長期的上昇（賃金増＋外部費用の内部費用化＋福祉）
- ② 反システム運動内の楽観主義の喪失
＝一九六八年（アメリカ覇権への抵抗、伝統的反システム運動への幻滅）
- ③ 同時にコンドラチェフ循環B局面に入ったことから生産費用の圧縮が右派の目標に
＝新自由主義
＝カオスの増大（ダボスVSポルトアレグレ）

●資本主義的世界経済を、①国際経済関係を中心とした重商主義的＝独占資本主義と把握

することで、資本主義的地理空間としての国家間体制の歴史的存在を、歴史学的に論証しようとする試み、②資本主義の歴史的時間の二重性（コンドラチェフ循環、長期持続＝長期的趨勢）を論証しようとする試み、③長期的趨勢に関わる反システム運動の動向の検証＝イデオロギーの問題化（ナショナリズム批判）

⇔ (A) ①と②との論理的関連とは？

たとえば資本蓄積サイクルと権力の領土主義的論理との関連

(ジョヴァンニ・アリギ『長い20世紀』)

(B) 「反システム運動」の運動論理とは？

世界規模での階級闘争との関係性？

「……資本主義的世界経済の基軸的過程としての階級闘争という概念は、それ程紋切り型のものではない。闘争という意味は、生産諸力の発展と組織をめぐる闘争、したがって生産手段と生活手段の直接的統制をめぐる闘争、その統制に対して事実上の影響を与える社会的諸関係をめぐらる闘争のことである。歴史的過程という意味は、対立する諸階級を絶えず形成し再形成する過程のことである。もちろん、既に言ったように、その構造、意識、組織、発展は、世界規模の蓄積過程の時間的・空間的に構造化された諸地域間あるいは内部の「歴史的・道徳的要素」によってさまざまである。……さらに、階級闘争が蓄積過程の社会的構造化そのものにもたらす変化は、地域に応じて異なった仕方で、歴史的過程としての階級闘争が展開される環境を変容させる。」(アリギ他 1992: 七五～七六頁)

・本報告での主題：サミール・アミンの現代資本主義理解とオルター・グローバリズム運動

- ① 「世界規模での価値法則」＝「経済的疎外」としての資本主義社会の特徴
- ② 資本主義世界システムの地理的二極化の歴史的過程
- ③ 現代の特徴＝普遍化された独占資本主義＋集团的三極帝国主義
- ④ 歴史の決定不全性
- ⑤ 反システム運動の課題（多極的グローバリゼーション、反資本主義、民主化）

・現代資本主義論の課題

- ① 資本主義の地理的空間の形成（国家と資本との関係性）
- ② 資本の内的論理と資本の外部の論理との関係

「しかし同時に、もちろん反システム運動は、現在および将来の運動が絶えず形成し作用すべき基盤を変化させる唯一の原動力ではない。運動が破壊するもの——蓄積過程の組織的原動力——もまた機能する。部分的には蓄積過程の「内的論理」によって、部分的には運動の成功そのものによって、すなわち「内的論理」の作用と矛盾の場としての歴史的基盤の絶えざる転換によって、機能するのである。とりわけ資本主義的世界経済の進行中の構造変化がその全般的作用のなかで事実上明らかにしたのは、階級闘争の過程が対立する諸側面から形成されていること、形成された諸関係の中で分極化していることである。」(アリギ他 1992: 五〇頁)

- ③ 歴史的時間としての資本主義の「危機」
- ④ 資本主義批判の論理の認識

参考文献：

アリギ『長い20世紀』、作品社、2009年。

アリギ、ホプキンス、ウォーラーズテイン『反システム運動』、大村書店、1992年。

ウォーラーズテイン『入門 世界システム分析』、藤原書店、2006年。